隣り合うマチエール
庭園にみられる差の並置に関する研究

東京藝術大学大学院
美術研究科美術専攻　建築研究領域
山口誠

[要旨]

紫宸殿南庭の構成要素は極限的に限定されている。そこには地面一杯に敷き詰められた白砂と、「右近の橘」「左近の桜」として知られる2本の樹木しかない。白砂に浮かび上がる橘と桜は象徴的な存在として感じられ、そう思わせる意図があるように思える。しかも桜は、もともとは梅だったものが、わざわざ植え替えられたという経緯もある。そのような強い象徴性を感じさせる一方で、橘と桜という組み合わせが何を象徴しているのかが不明である。

同様に、伝統的な日本庭園の構成要素にも明快な意図を読み取れないことは多い。その印象は美しくも漠然としたものとなっており、ヨーロッパの様式庭園のように、はっきりとした構造をもつ表出イメージを持っていない。

本論はまずそれら橘と桜の組み合わせが象徴するものを、奈良時代の『万葉集』と初の勅撰和歌集である『古今和歌集』に収められた歌に詠まれている梅・桜・橘を始めとする景物の含意から考察する。次にその象徴の意味するものが、紫宸殿南庭以外の事象にも見出すことができることを確認し、さらには日本庭園の表出イメージをつくる構造が、その象徴の意味するものと重なるものであることを明らかにする。

本論は二部構成となっており、第一部では、まず『万葉集』の含意を通してみてみると、南庭での最初の組み合わせとなる橘と梅は、いずれも特別な木という共通部分をもちつつ、日本と中国、神代と当代という差のペアであることがわかった。その後の『古今和歌集』ではいずれも「香りが思い出を呼び起こすもの」へと変化し、同じ含意となったことで差がなくなってしまった。そして梅が桜に植え替えられたのである。桜と橘の組み合わせになってからは、いずれも日本由来の花という共通部分をもちつつ、橘は「香る」、桜は「散る」ものとして、そこにある差が並置されることで、日本文化の規範を象徴していると結論を得た。

第一部でさらに続く各章では『古今和歌集』にある梅の歌群と桜の歌群のなかで、それら２つの花を主題とする歌が他の花よりも圧倒的に多く詠まれており、「香る」と「散る」

が並置されていること、漢字で書かれた真名序と、仮名による仮名序という二つの序も「差の並置」としてあることを確認した。そして清涼殿東庭でも「かは竹」は日本由来、「くれ竹」は中国由来として「差の並置」となっていた。紫宸殿南庭と同様に、そこでは日本と中国はアナロジーであり、そこには共通部分をもちつつ差があることが象徴されている。いずれの事例でも、共通部分と差は同質のなかにあり、そこに見られる差は対照的、対比的にはなっておらず、縁語的・順接的なつながりをもっている。

「差の並置」とは対象となるものの差を対立的に示すのではなく、そもそもアナロジーの関係にあるものを共通部分で重ねて、その残りの部分にある、つまり最初から同質のなかにある差を示すものと定義することができた。その共通部分と重なり具合は定まったものではなく、対象のどこにアナロジーを見定めるかによって変化する。

第二部では構成要素として「差の並置」が用いられている日本庭園の事例検証を行った。国指定特別名勝、国指定名勝を中心として抽出した74件を対象とし、「差の並置」が見られる事例を探した。そのなかで「差の並置」によって景が作られているものが14庭園と９種類の「差の並置」を見出すことができた。日本庭園での「差の並置」とは対比をつくらずに、共通部分が縁語的に重なりあうなかに見出されるものとなっていた。

もし差が対比的なものであったならば、そういった構造を人工的な意図として気がつくことが可能かもしれないが、縁語的な「差の並置」は景をごく当たり前の自然のように見せることで、そこに構成論理を見出すことは難しい。それが日本庭園の表出イメージをつくる構造を見えにくくしている理由だろう。しかし「差の並置」という視点で眺めてみれば、庭園の全体構成から部分に至るまで、共通点やアナロジーをもつ差が集積されていることに気がつくことができる。

第二部での考察を通じて、平安時代につくられた「差の並置」は日本庭園のあいまいな表出イメージをつくる構造であることと、さらには現代建築をも借景とする可能性を観察することができた。それは「差の並置」が現代の日本文化においても有効な視座としてありえることを示唆する。

博士作品「隣り合うマチエール」は浅草橋に計画された現代建築「MONOSPINAL」の外構と、瀬戸内海の離島にある日本家屋「本島別邸」を囲む３つの日本庭園を含んでいる。それらは第二部で得られた庭園での考察を参照し「差の並置」を用いてつくられたものである。本論における作品解題では第二部での事例検証と同様の視点を用いて作品を考察するとともに、「差の並置」が現代においても有用な価値観であることを示している。